

氷

夕方までに氷の橋をかけること、これがぼくらのその日の仕事だった。

一九五五年ころ、オホーツク斜面はウツ岳に連る造材現場での話である。

大学に入ったばかりのぼくにとつて、この冬休みの山かせぎ（バイト）は楽しかった。一度はやってみたかった飯場暮しができた上に、上司（なんのことはない、たったひとり）の相棒にして先輩がゆかいな人だったからである。

ウツ岳のふもとでは、巨大な広葉樹が伐り出されていた。

この場合、飯場の花形はやまご、やぶ出し、たま曳きのおやじたちで、道つけのわれわれはどちらかといえば軽く見られていた。

かせぎの高は、おそらくやまごの十分の、くらいの身分だったろうが、それもまた楽しいものである。

雪に穴を掘って巨大な焚火をして、のんびりしていても日給の安いわれわれは火目にみてもらえる。

橋

役に立つ樹を材木と呼び、何の役にも立たぬのを散木というそうであるが、この散木でいる気安さは格別のものがある。

さて、やまごが切り倒し、やぶ出しがそろえた巨大な用材を、たまという木製そりに頭だけかせて馬が曳き出すのがたま曳き、われわれは、そのたま曳きさんが通る道を、雪を掘ったり土とまぜて固めたりしながら造成するのである。

氷橋を作れ、といわれてぼくは血がさわいだ。そんなもの、子供のころにいくらでも作った経験がある。そんなおもしろい仕事をやらせてもらえるのは、ありがたい。

Tさんとぼくは、まず雪を掘り、笹の密生する地面を掘ったり土と雪を混ぜて盛ったりして、道の形を作った。

問題は、小さな川にかける橋である。いくら氷橋とはいえ、ある程度の骨格は木で作らなければならない。

Tさんはやさしい。雪を掘るのはぼく、土を掘るのはTさん、というような楽な仕事ば

●加藤 多一

かりをぼくにやらせてくれる。

今度はまったく同等の仕事ふたりでやる。腰ノコと手オノを持って、ふたりは細い木を求めて山に入った。

ドロノキとシラカバが混生しているあたりで、ぼくは手ごろなものを見つけた。やわらかくて切り倒しやすいドロノキである。

ノコを入れようとしていると、Tさんが追いついてきた。

「この木はだめだ」

「ちようどいい長さなのに」

「いや、この木はもっと伸びられる」

先輩が伐りはじめたのは、細めのシラカバだった。

「こういう木を、さがして伐ってくれ」

Tさんは、口数が少ない。少ない分はこちらで補わなければならない。

「こういう木」とはなにか——考えるとすぐわかった。伐ることによってまわりの重要な木が伸びるような木のことだ。氷橋の形をつける程度の木なら、除伐対象の価値のない

木でいいというのだ。

内心、ぼくは不満だった。

山じゅうに木は満ちている。おまけに国有林。もとはといえばアイヌモシリ。その前は神さまの所有にかかるともいえるのだ。

どの木を伐つてもなんということもないはずだ。直径三尺の大木ならともかく、湯のみちやわん程度の太さの木なら、どれを伐つても問題はなはずだ。現に、みんなやっているではないか。

ぼくの不満に気づいたか、Tさんは二メートルほどはなれたところに立っているひよろひよろのシラカバを、だまって指さした。

先輩には逆らえないオキテだ。

ぼくはそのさえないシラカバに切り目を入れ、様式どおり手オノでウケを入れた。

このあたり、本職のやまごが見たら笑い出すような「ままごと」である。

ウケの反対側から真横にノコを入れる。すぐ飛び出してくる白いノコくず。心にひびくような香りの白いものが、まるで液体のようにふき出してくる。

このときは、気取るまもなく木は倒れた。枝を払い、六メートルくらいのを引きずって川まで運ぶ。

造材現場の偉い人でもなく、道つけの人であるTさんが、無限（と思った）の木の中からちゃんと選択して若木を伐った。そのことの意味を知ったのは、二十年も後のことだった。

さて、氷橋。数本の細い木を川に渡し、そ

の上に柴木をならべる。その上に、土と雪と水をまぜたものを、積む。

ところで、角スコップを使って、水まじりの雪を積むのは、それほど容易ではない。多すぎる水は手前を低くして落し、それ以外のものをスコップを水平にもどしつづつ高いところまで投げあげる妙技はぼくにはうまくできなかった。

もちろん、気温は低い。温度を計ることとしてしなかつたけれど、早朝まだ雪の表面が青紫に見える時刻に仕事にでかけるとき、寒さで樹が裂ける音を何度か聞いた。

だから、水まじりの雪は、ほどなく凍り始める。

凍った以上は、氷は強い。大きなペルシユロン系の馬が通つてもびくともしない。楽しみながら作るので、氷橋にはずいぶん時間がかかった。

そのため、他のグループが橋の先の道つけの応援にやつてきた。

その人たちは、Tさんの仕事が遅くて役に立たないことを、あからさまに言った。

ぼくの耳に入れておけば、それがTさんに伝わるだろうという意図である。

だが、ぼくはその人たちに心を許さなかつた。Tさんとぼくとの仕事が遅いために、彼等の仕事がふえたのはわかるけれど、どうせどこかで働かなければならぬのだ。そんなにTさんをばかにしないでほしい。

山の中に、その日も夕暮れがきた。彼等がはやばやと飯場にひきあげたあと、

Tさんとぼくはもう一度川にもどり、われらの「作品」を鑑賞した。

青い凍った大気のなか、われらの氷橋は、りんとした形を保っていた。

明日、ぼくらは次の現場に移る。そしてこの橋は、雪煙りをあげて上流の方から走ってくる馬と人と巨大な丸太をいっしゅんのうちに、その背にのせるであらう。

「ここらあたりな」

と、Tさんは氷橋の真中に立つて言う。

「どういうわけか、まったいらだと弱いんだ。太鼓橋までいかななくても、真中を少しだけそらしたほうがいい」

Tさんとしては、氷橋の作り方を若いものに伝授したかったのだと思う。

「小さいときさ、落し穴作つただけで、枝の上に水と雪まぜておいたら、固すぎてにくたらしい友だち、落ちなくてさあ」

ぼくがいうと、Tさん吸いこまれそうなほど大きな口をあけて、笑った。

ぼくらは、力いっばい働いたもの同士が持つ連帯感で胸いっばいになり、あつたかいメシの待つ飯場へもどりはじめた。

ぼくは気がついてきた。あの彼等ならTさんのようにはなく手当り次第に細木を伐り倒し、短時間に仕事を片づけていたに違いない。

Tさんの後姿が急に大きく見えた。飯場の灯が近づくと、雪明りの道であつた。

(児童文学作家)